

『未来の国』ブラジルを探る～グローバル化するアマゾンの記憶と今～

鹿児島大学生涯学習教育研究センター 酒井 佑輔

NPO 法人かごしまルネッサンス理事 川口真紀子

1. 日本・鹿児島とブラジルのつながり

ブラジル連邦共和国（以下、ブラジル）は、ブラジル(B)、ロシア(R)、インド(I)、中国(C)の頭文字を並べた BRICs と総称されるように、新興国の中でも急速な経済発展を遂げる国の1つである。ブラジルは日本の国土の約 22.5 倍を有し約 2 億人の人口を抱える。2014 年に開催されるサッカー・ワールドカップ大会と 2016 年にリオデジャネイロで開催される夏季オリンピックも追い風となり、日本国内におけるブラジルの存在感はさらに高まっていくことが予想される。

ブラジルと日本との関係は、1908 年に開始された日本人移民の歴史抜きには考えられない。ブラジルへの移民は 1908 年 6 月 18 日に日本人 781 名が、移民船「笠戸丸」でサンパウロ州サントス港へ入港したことで開始される。彼らは主に大農場へ農業労働者として送り込まれ、生産盛期を過ぎ衰退したコーヒー園で働かされた。当時の日本人移民がブラジルへ渡った頃は 1888 年の奴隷制廃止から 20 年しか経過していなかったため、農場主の多くは移民を奴隷の代わりとして扱った。

劣悪な労働環境の中で耐え生活してきた日本人移民であったが、1922 年からコーヒー好況が到来したこともあり、過酷な労働条件のなかでも 3、4 年もすると移民たちの生活は次第に安定していく。移民のなかにはコーヒー耕地で貯めた資金をもとに、労働契約期間の満了後にコーヒー農園を出て利益を地主と分け合い（分益農）、土地を借りるかあるいは分割払いで土地を購入するなどして賃金労働者が自営農・独立農となっていく。風俗習慣や言語の全く異なるブラジル社会において、彼らは同県、親類などで集まり、集中的に土地を購入し日本の村落社会組織をモデルとした数多くの日本人居住地を形成する。

日本人移民が農業分野で安定した地位を築きはじめた矢先、ブラジルは 1942 年に第 2 次世界大戦へ参戦したのをきっかけに日本人の移民政策を禁止する。ブラジル国内で



【図 1】 入植初期の原生林伐採風景
出典) 『東京農大卒業生アマゾン移住 50 周年記念誌』
(2008)

も日本人移民に対する風当たりは強くなり、サンパウロ州などの日本人移民が多く住んでいた地域では、日本人学校での日本語教育、果ては日本語を話すことさえも禁止されてしまう。

日本人の移民政策は、第 2 次世界大戦終結後の 1953 年からアマゾン入植政策と共に再開されることとなる。戦前は農業移民のみであったのに対し、戦後移住者のなかには商業や工業を専門とする者も多く、業種は多様化していく。ブラジルへ渡った移民数は自費渡航者も含めて約 26 万人といわれている。後継世代を含めた日系ブラジル人総人口は約 150 万人と推定され、海外では最大規模だといえる。

日本人移民の潮流は 1980 年代後半に逆流し始める。日本からブラジルではなく、ブラジルから日本という潮流へ変化した要因としては、ブラジルを襲ったインフレなどの経済状況の悪化と、日本での労働力不足という双方の経済的問題があった。1990 年以降は入国管理法の改正に伴い、日系二世の配偶者および日系三世とその配偶者にも「定住者」という就労制限のない資格が与えられたことから、「デカセギ」ブームが到来し、多くの日系ブラジル人が日本の土を踏むことになる。彼らの多くは自動車・電気工業といった製造業や建設業等の単純労働に従事する。しかしながら、

2008年のサブプライムローン問題に端を発したリーマンショックにより、多くの日系ブラジル人が職を失い帰国することとなる。

なお、在日ブラジル人の数は中国人、韓国・朝鮮人、フィリピン人について多い。彼らの多くは自動車・電気工業といった製造業関係の雇用が多い愛知県や静岡県、三重県、岐阜県等に集中している。

鹿児島県が公表する「外国人登録者数」（平成23年12月31日現在）によれば、鹿児島県全体でブラジル人は32名いる。数としては中国人(2639名)、フィリピン人(998名)、韓国・朝鮮人(497名)、米国人(218名)について多い。

鹿児島とブラジルとの歴史それ自体は、1906年の植民地開拓を目指した弁護士隈部三郎に始まる。1908年の第1回の移民船「笠戸丸」に乗船した781人のうち、鹿児島県人はその約2割にもなる172人(46世帯)おり、沖縄県の325人に次いで多かった。1913年には、他県に先駆けてブラジルで最初の県人会を結成し、2013年10月には創立100周年を迎える。また、「鹿児島県移住者の子弟を県内の大学に留学させ、母県の実体を熟知させるとともに、本県と移住先国との緊密化に貢献する有為な人材を育成する」ことを目的とした県費留学生受入事業は1970年から今日まで続いており、ブラジルからの受入実績は総勢77名となる(鹿児島県『平成24年度海外技術研修員県費留学生報告書』)。(ペルーからは総勢22名、アルゼンチンからは総勢20名の受入実績がある。)ブラジルにおいても、ブラジル鹿児島県人会会長を現在務める園田昭憲氏が鹿児島県の青年を1年間受け入れる事業を行っている。本事業は2004年から今日(2013年)まで行われており、ブラジルへ渡った青年は日本語学校や現地農家、ブラジルの邦字新聞社等で研修を実施している。このようにして鹿児島とブラジルとの相互交流は現在もなお続いている。

特筆すべきは、公益財団法人鹿児島市水族館公社(以下、かごしま水族館)によるブラジル・アマゾンとの関わりである。かごしま水族館は、全長4メートルにもなる世界最大の淡水魚でアマゾン川流域に生息するピラルクー(Pirarucu)を展示しながら、水槽内繁殖に取り組んでいた。その取り組みがアマゾン地域で淡水魚の養殖指導を行ってきたJICA専門家の目にとまり、ブラジルにおけるピラルクー養殖開発で協力を求められたのである。こうして2003年にはかごしま水族館職員の中畑勝見氏が現地での技術指導、調査、セミナー開催などを実施している。また、かご

しま水族館はJICAとの共催でアマゾン特別企画展を開催し、鹿児島市でブラジル・アマゾンに対する理解促進の活動も行っている。かごしま水族館はその後にもJICAの地域提案型草の根技術協力事業を通じて、「パラ州ベレーン市周辺零細漁村における持続的開発」プロジェクトを立ち上げている。実施期間は2006年から2008年の3年間で、パラ州農業技術普及公社(EMATER)をカウンターパートに漁業者を対象とした地元原産魚類の養殖技術確立と、子ども達を対象とした環境教育活動を行い、成果を上げている。

以上のように2013年に100周年を迎えた鹿児島県人会の移民史や、先に述べた多様なステイクホルダーによる相互交流を踏まえると、鹿児島とブラジルのつながりは密だと言えるのではないかと。しかしながら、こうした両地域の関係性はこれまでほとんど語られてこなかった。そこで、企画立案者である筆者らがNPO法人かごしまルネッサンス(以下、かごしまルネッサンス)の会員と理事であったことも考慮し、「かごしまルネッサンスとかごしま水族館並びに生涯学習教育研究センターによる産学官連携の充実」と「2013年のブラジル鹿児島県人会創立100周年と関連したブラジルの歴史や文化、移民に関する理解の促進」を目的とした公開講座を実施することとした。

2. 実施準備

以上の目的を達成するため、かごしま水族館の中畑氏に「グローバル化するアマゾンの記憶と今」というテーマで講演依頼を行い、二つ返事で承諾を得ることができた。また、ブラジルの概要や文化、移民の歴史について説明する必要があると考え、筆者の酒井も一部講演を担当することとし、公開講座自体を2部制に分けた。聴覚・視覚のみならず、味覚でもブラジルを堪能してもらうため、ブラジルで有名な一口では食べきれない大きさのボンボンチョコレートや、ブラジル産のパッションフルーツ、グァバ、マンゴーのジュースを用意し、足を運んでくれた方々へ振る舞うことにした。

実施会場については、できるだけ多くの方々に足を運んでもらうことを第一に考えた。その結果、「敷居が高く入りにくい」といわれる鹿児島大学ではなく、天文館などの人が行き合う場所に立地し、多様な年代が出入りするマルヤガーデンズの1Fイーストガーデンを選んだ。マルヤガーデンズのHPや、マルヤガーデンズレポーターによるブログを通して広く広報ができる点も、実施会場を選定した理



【図2】 マルヤガーデンズのホームページ

NPO法人かごしまルネッサンス 鹿児島大学生涯学習教育研究センター共催 公開講座

「未来の国」ブラジルを探る グローバル化するアマゾンの記憶と今

Vamos conhecer o Brasil!

2014年のサッカー・ワールドカップ大会と2016年の夏季オリンピックの開催を控え、世界から熱い視線を集めているブラジル。今年にはブラジル鹿児島県人会創立100周年を迎える記念すべき年でもあります。本講座では、ブラジルの概要やアマゾン地域における国際協力の舞台裏等について専門家が語ります。
躍動するブラジルのリズムをあなたも感じてみませんか？

- ・日時：3月24日(日) 10:30~12:30 (10:00開場)
- ・定員：40名(先着順)
- ・場所：マルヤガーデンズ 1F イーストガーデン
- ・受講料：無料(当日、資料・チョコレート・コーヒー代として500円徴収します)

講演：「ブラジルの概要と鹿児島とのつながり」
講師：酒井 佑輔 氏
(鹿児島大学生涯学習教育研究センター講師)
神戸外語大学在籍中にブラジル北東部へ留学し、Favela (スラム) で公衆衛生ボランティアに従事。大学卒業後、メキシコに勤務。退職後は東京農工大学大学院に進学し再度ブラジルへ留学。アマゾン・トメアスにおいてアグロフォレストリー普及指導・環境教育研究や、有機認証に関する生産者の意識調査等に従事。NPO国際協力のポルトガル語通訳や翻訳・翻訳経験有り。

講演：「グローバル化するアマゾンの記憶と今」
講師：中畑 勝見 氏
(公益財団法人鹿児島県水産館公社 海獣展示係長)
東京水産大学(現：東京海洋大学)卒業後、三重県水産技術センターを経て、かごしま水族館に勤務。飼育を担当していた世界最大級の淡水魚・ピラルクーが棲ぐアマゾンを訪れ、大自然と人々に魅了される。以後、「アマゾン魚類繁殖・ピラルクーの生物学的解明」や、JICA等の技術協力事業「パラ州バレーン市周辺養殖漁村における持続的開発プロジェクト」等に従事。

お問い合わせ・お申し込み先：鹿児島大学生涯学習教育研究センター 酒井研究室
TEL:099-285-7292 FAX:099-285-7265 E-MAIL: sakai@ife.kagoshima-u.ac.jp

【図3】 筆者らが作成したチラシ

由の1つである。

公開講座を実施する日程は、友人や当センターの事務補佐員などから情報を収集した。その結果、学校の卒業式や送別会などが入らない3月の週末の日時ということで、3月24日(日)の昼間の時間帯を選んだ。

広報活動については、マルヤガーデンズのHP以外にも、筆者らが自らチラシを作成し配布した。南日本新聞の「みなみのカレンダー」にも宣伝を掲載していただいた。

3. 3月24日公開講座当日の内容

当日は40名の定員に対し、51名もの方々が参加してくださった。当日の準備は、企画立案者である筆者らだけではなく、鹿児島大学の学生3名(水産学部1年：早坂央希、法文学部2年：山元勇人、水産学部2年：東山時也)にボランティアスタッフとして手伝ってもらった。講座全体の総司会会は筆者(川口)が務めた。当日のスケジュールは以下のとおりである。

【スケジュール】

- 10:00~10:30 受付
- 10:30~10:35 冒頭挨拶：酒井
- 10:35~11:05 講演「ブラジルの概要と鹿児島とのつながり」
酒井
- 11:05~11:55 講演「グローバル化するアマゾンの記憶と今」
中畑
- 11:55~12:25 質疑・応答
- 12:25~12:30 終了挨拶：NPO かごしまルネッサンス副理事長 河野
- 12:30 終了

中畑氏と筆者(酒井)は、パワーポイントを用いて講演した。講演内容としては、筆者(酒井)がブラジルの地理・社会・歴史的な概要と、日本・鹿児島県からブラジルへと渡った移民史について説明した。また、アマゾンの日系ブラジル人によって営まれているアグロフォレストリー(農林複合経営)が世界的に注目されている事実と、鹿児島県出身の日系ブラジル人の方がそのアグロフォレストリーに従事していることを説明した。

中畑氏はアマゾンに住む人々の生活文化や現地に生息する動植物、アマゾンが抱える環境問題、そして中畑氏自らが取り組んだJICAでのプロジェクトについて説明した。講演中はピラルクー(Pirarucu)のうろこや、アグロフォレストリーで栽培されるブラジルナッツ(Castanha do Pará)の種子やその殻を参加者の方々にまわした。実際に手に取ってもらうことで、アグロフォレストリーやアマゾンをより身近に感じてもらえるようつとめた。会場後方では、アマゾンに住む人々が現在も使用しているキャッサバの毒と水分を取りだす道具チピチ(Tipiti)や、ピラルクーのうろこで作った民芸品、アグロフォレストリーで生産され

たアマゾンフルーツのジャム、ブラジルで購入したポルトガル語の雑誌やポルトガル語訳された日本の漫画等を展示した。

講演の最後には質疑応答の時間を設けた。「実際にアマゾンへ行くにはどうしたら良いか」や「アマゾンの環境破壊の現状をより詳しく知りたい」といった質問が寄せられ、講演者が自らの経験を踏まえたうえで説明しているうちに終了の時間となった。

4. 反響と今後の展望

当日参加してくださった51名のうち32名からアンケートを回収することができた。32名のうち21名が女性であった。参加者の年代は、40代に続いて50、60代が多かった。「どこで講座を知ったか」という質問に対しては、17名が「知人・友人を通じて知った」と回答し、「新聞を通じて知っ

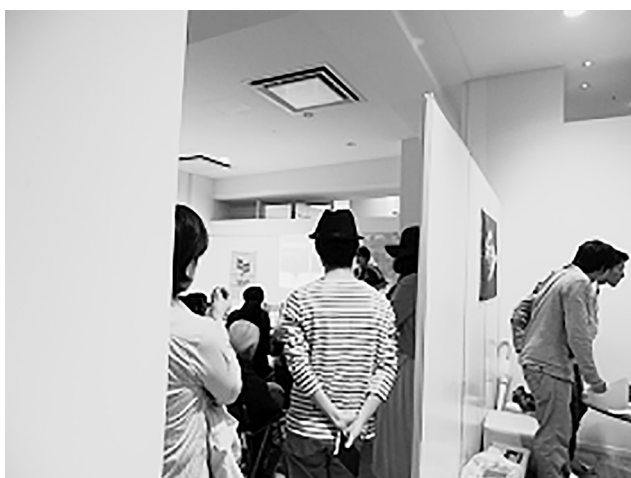
た」という方が5名、マルヤガーデンズのホームページで知ったが1名、それ以外にも当センターのダイレクトメールで知った方が1名いた。講座の満足度に対しては、20名の方が「とても満足」と回答し、7名の方が「まあまあ満足」と答えてくださった。参加した感想としては、「ブラジルに関する知識がないにもかかわらず非常に興味ある内容で、すっかりブラジルファンになりました。とても楽しかったです。」(60代女性)や「観光ガイドのようで楽しい2時間であった。30代の頃、ブラジルに夢中になっていたころが懐かしく思い出されました。」(60代男性)、「普段ブラジルとは縁のない生活を送っているため、とても刺激的で今回のことでとても関心を持つことが出来ました。」(40代女性)など、前向きなご意見を多くいただいた。また「目的と結論がはっきりしていたらもっと聴きやすかったと思



【図4】 会場の様子1



【図6】 筆者（酒井）による講演



【図5】 会場の様子2



【図7】 中畑氏による講演

ます。次につなげるために意見を書かせてもらいました」(50代女性)と、筆者を叱咤激励するご意見もいただいた。「今後、どのような講座を受けてみたいか」という質問に対しては、「ブラジルの食文化やブラジルの生き物」(50代女性)や「本講座内容と関連した講座を引き続きうけたい」(40代女性)、「ブラジルやアグロフォレストリーに関する連続講義」(60代男性)など、ブラジルに特化した内容を求める要望や、「様々な国で活動されている方々の話をまとめて聞きたい」(40代女性)といった、ブラジルにとどまらない多様な国々の話を聞きたいと回答してくださった方々が多くいた。アンケートの最後の欄に設けた「自由記入欄」に対しては、「もう少し大きな会場が良い」(40代女性)や「会場がユニークで面白いです。大学や公民館より来やすい」(30代男性)など、会場に関する意見もいただいた。

5. おわりに (酒井)

2012年に本センターへ着任した筆者は、2011年から本学が実施する「南米における進取の気風研修計画」の引率として関わりはじめた。2013年はブラジル鹿児島県人会100周年を迎える記念すべき年ということもあり、学外でブラジルに関する公開講座や出前授業を実施する機会をいただくことがある。こうした環境や機会が多くあることに本人が一番驚いていることは言うまでもない。

しかし、ブラジル鹿児島県人会の皆さまや本学からブラジルへ渡られた方々を思うと、私のような浅学非才の若造

がブラジルや鹿児島の移民史について語って良いものかと戸惑うときがある。その際に思いとどめ発話しようと考えた動機の一つは、ブラジルという国が、優劣関係の立場性にもとづく価値観によって恣意的に単純化され、「第三世界」「アマゾン」「サンバ」「サッカー」等の言葉でしか語られない現状に対する、戸惑いにも似た感情である。また、県人会や本学OB・OGの皆さまとブラジルでお会いするたびに、彼ら・彼女らが歩んできた歴史を彼ら・彼女らの住む国ブラジルを広く多くの方々に理解してほしい、知ってほしいという思いもある。ブラジルに関連する講座を実施する際にいただく「ブラジルをもっと知りたい」というコメントにも非常に励まされる。

今後も多様なかたちでラテンアメリカ・ブラジルと関わりながら、公開講座等を実施していこう。これまであまり語られてこなかった、鹿児島と「世界でもっとも遠い国」ブラジルの関係やそのつながりに少しでも多くの人に興味・関心をもってもらえるよう、引き続き努力していきたい。

【参考資料】

- ・法務省『在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表』、2012
- ・東京農業大学卒業生アマゾン移住50周年記念誌編集委員会『東京農大卒業生アマゾン移住50周年記念誌<ゴリラのように逞しく、神のごとき愛と英知を>』、伯国東京農大大会北伯分会、2008
- ・厚生労働省鹿児島労働局『鹿児島県内の外国人登録者数』、2012